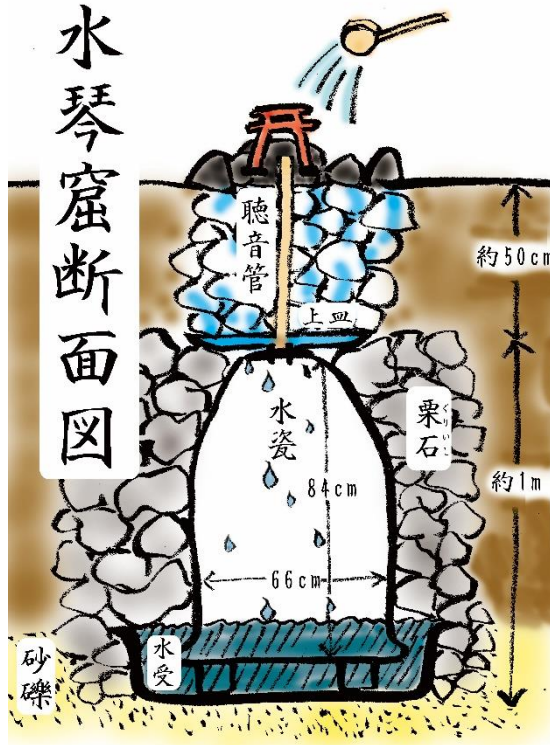


## 水琴窟とは

水琴窟とは、遠州流の祖小堀遠州が齡十八にして造りあげ、師の古田織部をも驚愕せしめた『洞水門』が原型とされる。手水鉢手前の土中に伏せ埋められた瓷に、水門より水滴が落ちる事によって、空洞の共鳴により音が増幅され、まるで琴の様な音色を醸す事より『水琴窟』と呼ばれる様になった。以降、江戸から明治頃迄は盛んに用いられたが、その技術は一旦途絶える。しかし昭和の終わり頃、品川歴史館の庭園工事中に古の水琴窟が発掘され、以降再び水琴窟が世に広まる事となった。



## 水琴窟断面図

## 都内随一の大瓷

この水琴窟に用いられている瓷は、高さ八十四センチ、直径六十六センチにも及ぶ大瓷で、村石家より奉納されたものである。この大ききの瓷を用いた水琴窟は知る限りでは唯一無二で、

少なくとも都内では随一と云っても過言ではなからう。

造園研究者の平山勝蔵氏によれば、底部の水が深ければ深いほど「静的な深みのある音」になるとされ、この大瓷より響く音は、当に静的かつ深い音色である。

## 村石家と大瓷の由来

社史に記されているとおり、当神社はかつて羽田穴守町（現、羽田空港）に鎮座し隆盛を極めた。

然しながら昭和二十年の敗戦を臨み、GHQの指令により四十八時間以内の強制退去を余儀なくされ、穴守稻荷神社も村石家も、不慮も嘗ての地を離れざるを得なくなった。

この大瓷は戦前より村石家で水瓷として用いられていたもので、七十余年の歳月を経て、再び水を湛える事となった。穴守稻荷神社と羽田三町の住民が辿った歴史と復興の象徴として、令和三年春この大瓷の他、湧水を得るための削井をはじめ作庭改修に係る費用の一式を奉納された赤心は如何許りばかりか知れぬ。

令和の御代に甦る悦き音色に心を静め穏やかな心持ちで参詣頂ければ幸いである。

令和三年四月五日

穴守稻荷神社々務所

